

厚生労働科学研究費補助金（がん政策研究事業）
分担研究報告書

将来に亘って持続可能ながん情報提供と相談支援の体制の確立に関する研究

研究分担者 藤 也寸志 国立病院機構九州がんセンター・院長

研究要旨

本研究の目的は、将来に亘って持続可能ながん情報提供と相談支援の体制の確立することである。そのためには、1) 急速に多様化するがん情報ニーズに迅速かつ正確に対応するために“All Japan”でのがん情報提供体制のあり方を提言すること、2) がん診断早期からのがん相談支援の有効性の検証を行い、エビデンスに基づく相談支援体制を構築することの両者を併行して進めることが必須である。本分担研究者は両方の活動グループに所属し、1)については、全国がんセンター協議会の代表として国立がん研究センターが作成する「がん情報サービス」のスリム化や改訂における連携の可能性を求める作業を主導し、モデルケースの構築を目指して食道がんと大腸がんの解説の更新を行った。さらに、2)については研究推進のあり方に関して議論に加わり、緩和ケア研究のエビデンスや相談支援センターの有効性の検証を進めるに当たって留意すべき事などを提示した。

A. 研究目的

- 1) 急速に多様化するがん情報ニーズに迅速かつ正確に対応するために“All Japan”でのがん情報提供体制のあり方を提言する。
- 2) がん診断早期からのがん相談支援の有効性の検証を行い、エビデンスに基づく相談支援体制を構築する。

B. 研究方法

- 1) 現行の「がん情報サービス」のあり方について内容を詳細に検討し、必要なもの・不必要なものの仕分けを行う。さらに、全国がんセンター協議会（全がん協）における情報作成と提供のあり方野中で、国立がん研究センターとの連携の意義と可能性、持続可能性等に関する課題、そのための検討事項等について検討する。

- 2) 有効性検証のための全体調査の枠組みに関する議論を行い、相談支援の効果を適切に測定できる指標を検討する。

（倫理面への配慮）

本研究では介入試験は行わないが、相談支援の有効性検証のための全国調査は疫学研究の対象になると考えられ、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」を遵守してこれを行う。

C. 研究結果

- 1) 断捨離 WG のリーダーとして、「がん情報サービス」の各項目の必要度の検討を行った。患者代表の意見も踏まえながら、思い切った断捨離を行った。

さらに、全国がんセンター協議会の代表

として、国立がん研究センターが作成する「がん情報サービス」の改訂における連携の可能性を求める作業を主導し、モデルケースの構築を目指して食道がんと大腸がんの解説の更新を行った。この作業を通じて、既存作成方法と専門家作成原稿の特長の整理と今後の持続可能な作成方法のあり方を国立がん研究センタースタッフと議論し、情報コンテンツの作成フロー、効率化のための検討を行った。

2) がん相談支援の有効性を検証するための全体調査の枠組みに関する議論に加わった。その中で、緩和ケアの有効性に関する研究のエビデンスの説明を行った。さらに、それを参考にすることで、相談支援センターの有効性の検証を進めるにあたっては、患者・家族のみならず、相談支援センターがあることで助かっている人（医師を初めとする医療者や地域の医療介護従事者など）にも対象を広げる必要性があることを提示した。

D. 考察

近年、がん情報に関しては、情報更新の頻度や速さが急激に増加しており、さらにゲノム医療をはじめとする新しい医療に関する情報が求められている一方で、科学的根拠に基づかない情報に対する対策も求められており、これまで以上に迅速かつ確に情報提供を行える持続可能な体制を目指していく必要がある。本研究班は、国立がん研究センターのみならず、各学会や団体がジョイントして、All Japan のがん情報提供体制の確立を目指すものである。このあり方については、既に第2期がん対策推進基本計画で「国、国立がん研究センター

及び関係学会等は、引き続き協力して、がんに関する様々な情報を収集し、科学的根拠に基づく情報を国民に提供する」と記載されているものの、具体的な活動はほとんどなされてこなかったのが現状である。

この点に関しては、本分担研究者は、全がん協の承認を得て、その代表として国立がん研究センターとの共同作業を行った。最初の取り組みとして行った「食道がん」と「大腸がん」の解説の改訂のあり方をプロトタイプとして、この共同作業を他のがん種に展開していく予定である。この関係性の構築が他学会・研究会等と国立がん研究センターとの共同の雛形になるか否かは現時点では不明であるが、本研究班が構築を望む形の一部は実現できてきたと考える。

がん相談支援の有効性の検証とエビデンスに基づく相談支援体制を構築については、本年度は研究方法の議論に留まっている。しかしながら、propensity score matching 解析の方法を模索するなど、世界的に見てもがんの相談支援の効果検証のための全く新しい取り組みになる可能性があり、精力的に推進していく必要があると考える。

E. 結論

本研究の目的を達するためには、各種学会を巻き込んだ全国展開をすることが極めて重要である。地道な作業であっても、がん対策推進基本計画の達成のためには、本研究のような活動は継続していく必要があると考える。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

I 著書 なし

II 総説

1. Morita M, Ikebe M, Kagawa M, Nakaji Y, Sugiyama M, Yoshida D, Ota M, Iguchi T, Sugimachi K, Kunitake N, Saeki H, Oki E, Ohga S, Toh Y, Maehara Y. Current treatment and application of hyperthermia for squamous cell carcinoma of the esophagus. *Thermal Medicine*. 2017;33:63-73.
2. 池部正彦、太田光彦、南一仁、森田勝、藤也寸志. 解剖から押さえる食道がんの病態と治療法の選択. *消化器看護がん・化学療法・内視鏡* 2017;21:6-11.
3. 太田光彦、池部正彦、森田勝、江頭明典、吉田大輔、信藤由成、南一仁、藤也寸志. 特集：食道外科・消化管吻合アラカルト—あなたの選択は？ 頸部食道胃吻合：三角吻合. *臨床外科* 2017;72:402-4
4. 太田光彦、香川正樹、中司悠、杉山雅彦、吉田大輔、池部正彦、森田勝、藤也寸志. 胃癌—開腹手術. *臨床と研究* 2017;94:51-7

III 原著

5. Jin Li, Xu R, Xu J, Denda T, Ikejiri K, Shen L, Toh Y, Shimada K, Kato T, Sakai K, Yamamoto M, Mishima H, Wang J, Baba H. Phase II study of S-1 plus leucovorin in patients with metastatic colorectal cancer: Regimen of 1 week on, 1 week off. *Cancer Sci*. 2017;108:2045-51.
6. Miyazaki T, Kitagawa Y, Kuwano H,

- Kusano M, Oyama T, Muto M, Kato H, Takeuchi H, Toh Y, Doki Y, Naomoto Y, Nemoto K, Matsubara H, Yanagisawa A, Uno T, Kato K, Yoshida M, Kawakubo H, Booka E, Kawamura O, Fukuchi M, Sakai M, Sohda M, Nakajima M. Decreased risk of esophageal cancer owing to cigarette and alcohol cessation in smokers and drinkers: a systematic review and meta-analysis. *Esophagus*. 2017;14:290-302.
7. Tachimori Y, Ozawa S, Numasaki H, Ishihara R, Matsubara M, Muro K, Oyama T, Toh Y, Udagawa H, Uno T. Comprehensive registry of esophageal cancer in Japan, 2010. *Esophagus*. 2017;14:189-214.
 8. Okuno T, Wakabayashi M, Kato K, Shinoda M, Katayama H, Igaki H, Tsubosa Y, Kojima T, Okabe H, Kimura Y, Kawano T, Kosugi S, Toh Y, Kato H, Nakamura K, Fukuda H, Ishikura S, Ando N, Kitagawa Y. Esophageal stenosis and the Glasgow Prognostic Score as independent factors of poor prognosis for patients with locally advanced unresectable esophageal cancer treated with chemoradiotherapy (exploratory analysis of JCOG0303). *Int J Clin Oncol*. 2017;22:1042-9.
 9. Masuda M, Okumura M, Doki Y, Endo S, Hirata Y, Kobayashi J, Kuwano H, Motomura N, Nishida H, Saiki Y, Saito A, Shimizu H, Tanaka F, Tanemoto K, Toh Y, Tsukihara H, Wakui S, Yokomise

- H. Thoracic cardiovascular surgery in Japan during 2014: Annualreport by The Japanese Association for Thoracic Surgery. Gen Thorac Cardiovasc Surg. 2016;64:665-97. なし
3. その他
なし
10. Honjo H, Toh Y, Sohda M, Suzuki S, Kaira K, Kanai Y, Nagamori S, Oyama T, Yokobori T, Miyazaki T, Kuwano H. Clinical significance and phenotype of MTA1 expression in esophageal squamous cell carcinoma. Anticancer Res. 2017;37:4147-55.
- IV 症例報告
11. Egashira A, Ikeda Y, Morita M, Taguchi K, Kinjyo N, Tsujita E, Minami K, Yamamoto M, Toh Y. Ileum preserving expanded jejunectomy and pancreaticoduodenectomy with combined resection of the superior mesenteric artery for huge retroperitoneal solitary fibrous tumor. Clin Case Rep. 2017;5:1264-8.
12. 河野浩幸、吉田大輔、南一仁、山本学、池部正彦、森田勝、藤也寸志. 穿孔性腹膜炎による Aeromonas hydrophila 敗血症の 1 例. 日本救急医療会誌 2017;28:857-62

V 学会発表 なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録